

民族文化と学校文化に生きる子どもたち

— 中国のイ族に対する調査を中心に —

張 瓊華

1. はじめに

多民族国家において、近代学校教育の普及は、学校教育を通じて、共通文化・共通言語が地域社会、少数民族地域に普及されていく過程でもある。それは子どもたちに教育機会を提供することであるが、主流民族の文化が山間僻地や少数民族地域へと拡張していくことをも意味する。多民族国家・中国において、義務教育の普及は、都会や東南沿海地域では実現されてきたが、西南や西北などの貧困地域・少数民族地域では、近年になってやっと就学率が上がってきており、多くの子どもたちは学校で生活を送るようになり、或いは余儀なくされている。それによって、子どもたちはそれまで身につけてきた民族文化とは完全に異質な文化を学校で体験することになる。また、近年の中国では、経済発展に伴い、都市化、学歴社会が進み、それと同時に、世界経済のグローバル化の波も押寄せられてきている。激動する社会の中で、少数民族地域の子どもたちは、学校でどのように生活・学習し、将来展望や民族文化への認識がどのように変化しているのだろうか。本稿では、それらの問題を明らかにするために、中国のイ族地域での調査結果に基づいて検討する。それによって、民族文化と学校文化に生きる少数民族地域の子どもたちの生活や意識の実態を明らかにしたい。

中国には主流民族である漢民族のほか、55の少数民族が存在している。少数民族の多くは東北、西北、西南などの辺境地域に居住し、沿海地域や内陸の漢族とは異なる文化を有している。少数民族の固有文化・伝統は日常の生活様式や各種行事によって、代々受け継がれてきた。しかし学校教育、とくに義務教育が始まると、その子どもたちは学校で学校文化を体験することになる。もちろん、少数民族の中にも、民族文字をもつ民族もいれば、もたない民族もいる。多文化共生の流れの中で、民族の言語・文化を学校のカリキュラムに取り入れ、二言語教育を行う民族もいれば、民族によって、或いは地域によって、民族言語を教育に取り入れることなく、通常の学校教育のみ（主流民族地域の学校教育と同様な教育）を行う民族もいる（張、2002、216頁）。後者の場合、子どもたちは入学する前に、地域社会や家庭で自民族文化を身につけていたにも関わらず、

学校に入ると、学校文化・主流民族の文化の中で、それまで慣れ親しんだ文化とは断絶した新たな文化を習得することになる。それによって、学校の適応や意識の変化などが問題となろう。

これまで、中国農村貧困地域の学齢児童の就学状況（張 2008）や貧困と教育との関係（張 2009）について検討してきたが、学校文化と少数民族出身の子どもたちの学校生活や意識との関連については研究されていない。本研究では、中国西南地域にある雲南省のN県の子どもたちを対象にインタビュー調査とアンケート調査を実施し、その結果に基づいて次のことを検討する。まず、子どもたちが置かれている地域社会や家庭の文化的環境を明らかにし、次に子どもたちはどのように学校生活を送っているのか、そして将来展望や民族文化への認識はどうなっているのかを解明する。

雲南省は高原・僻地であり、94%は山地である。同省には20あまりの少数民族が居住している。少数民族の人口は省人口の3分の1を占めている。中国では、各少数民族の集まり住んでいる地域に民族自治権が与えられている。N県はイ族自治県であるが、ほかに漢民族、回族、白族もいる。県の総人口は23万人で、そのうち、イ族は39%、回族は4%、白族は1%を占めており、残りは全員漢族である。少数民族の中で、イ族の人口が一番多い。県は郷・鎮（行政の末端組織）で構成され、郷・鎮は村によって構成される。N県には10の郷・鎮があるが、少数民族は住み分けていて、1つの村には大体1民族しか居住していない。山間僻地であるため、交通の便も悪い。またそれぞれの民族の言葉も異なるため、民族間の往来はあまりない。近年、中国沿海地域や都会の経済発展が著しくなってきたため、村の人々は、都会へ出稼ぎに行く人もいるが、依然として農業中心の生活を営んでいる。

N県は国家が認定した貧困県である。また農民1人あたりの年収は現在3000元弱であり（日本円に換算すると、4万円位）、それも現金収入ではなく、収穫した農産物によって計算された金額である。（表1を参照）

表1 人口と収入

	イ族の人口 (%)	一人当たりの年収
N 県	34	2956元
W 鎮	91.50	2121元
Y 郷	31.22	2870元

表2 調査地域と対象

	学年	クラス
W鎮小学校	小6	2クラス
	中1	2クラス
W鎮中学校	中2	2クラス
	中3	2クラス
Y郷小学校	小6	1クラス
	中1	1クラス
Y郷中学校	中2	1クラス
	中3	1クラス
小都市 高等学校	高2	2クラス
	高3	2クラス

本研究は、N県のW鎮とY郷を対象に、2009年9月中旬に調査を実施した。W鎮はイ族の占める割合が91.5%に達し、イ族が集中して居住する地域であり、Y郷はイ族が31%を占め、イ族と漢族の雑居地域である。W鎮の平均年収から見ると、県の中でも、貧しい地域であるが、貧富の差はそれほど大きくはなく、Y郷は割りと豊かな地域ではあるが、中には貧富の差が大きい²。この両地域を対象にすることによって、漢族との比較を通して、イ族の子どもたちの状況を明らかにすることができよう。

調査は、5つの学校で749人に回答してもらった(表2)。ただし、分析は漢族とイ族のみを対象にし、漢族は269人で、37.1%を占め、イ族は457人で、62.9%を占める。

2. 地域や家庭の文化的環境——農業文化、民族文化の空間

漢族や回族はそれぞれ山麓に居住しており、稲作を栽培している。ほかの民族は山腹や山頂に住み分けしていて、麦、ジャガイモ、豆、大根などを作っている。近年、経済作物の栽培が盛んになっている。県にビール工場があり、農民が作った麦でビールを作って東南アジアに輸出している。またW鎮の山では松茸が採れ、それが日本に輸出されている。以下では、文化の側面から地域社会や家庭の環境を検討しよう。

2.1 地域社会の環境

村と村とはかなり離れており、山々を徒歩で越えなければ、別の村の人々と接触する

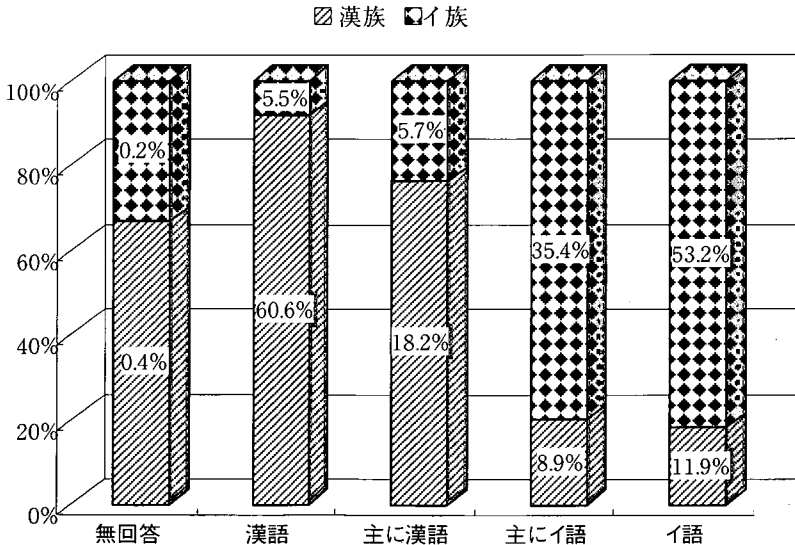


図1 村人とのコミュニケーション言語

ことはできない。農民は自給自足の生活をしているため、とくに村以外の人々と接する必要性もない。したがって、村人、とくに女性は、村すら出たことがない人も少なくない。当然、外の世界も知らない。もちろん共通言語となっている漢語も話せない。各村は民族の伝統文化を維持し、日常的にも民族言語を使っている。

子どもたちは地域社会で自然に民族の言葉や習慣を身につける。学校に入っても、約9割の子どもたちは近隣や村の人々とはほとんどイ語でコミュニケーションをしていることが分かる（図1を参照）。

2.2 家庭環境

家庭環境については、親の職業や学歴、家庭でのコミュニケーション言語などから見

表3 学校段階と親の職業

a) 父親の職業 (単位：%)

	農民	給与生活者	商人	その他	合計
小学生	86.5	4.0	7.1	2.4	100
中学生	91.2	2.5	5.7	0.7	100
高校生	86.2	7.2	3.9	2.6	100
合計	89.3	3.8	5.6	1.4	100

b) 母親の職業 (単位：%)

	農民	給与生活者	商人	その他	合計
小学生	92.9	0.8	4.8	1.6	100
中学生	94.6	0.7	2.7	2.0	100
高校生	85.8	3.9	6.5	3.9	100
合計	92.4	1.4	3.9	2.4	100

表4 生徒の民族出身と親の職業

a) 父親の職業 (単位：%)

	農民	給与生活者	商人	その他	合計
漢族	90.1	1.5	5.7	2.7	100
イ族	88.8	5.0	5.5	0.7	100
合計	89.3	3.8	5.6	1.4	100

b) 母親の職業 (単位：%)

	農民	給与生活者	商人	その他	合計
漢族	90.2	1.9	5.3	2.6	100
イ族	93.7	1.1	3.1	2.2	100
合計	92.4	1.4	3.9	2.4	100

てみよう。

子どもたちの親の職業を見ると（表3）、「給与生活者」（教員、公務員、医者など）が少なく、とくに母親のほうが少ない。郷・鎮で小さい商店を営んでいる商人もいるが、1割にすら達していない。ほとんどの子どもたちの親は農民である。

子どもたちの民族出身別に見ると（表4）、漢族出身の子どもたちの親の職業階層は決してイ族出身の子どもたちの親の職業階層と異なっているわけでもない。つまり、親の職業階層には民族による違いはほとんど見られないのである。山間僻地に居住している人々は同じく農業をしていることが分かる。

では、親の学歴はどうであろうか。表5に示されている通り、学校段階別に見ると、父親の学歴は、「中学校卒」の占める割合が高く、次に「小学校を卒業してない」、「小

表5 学校段階と親の学歴

a) 父親の学歴 (単位：%)

	学校に通った ことがない	小学校を卒業 してない	小学校卒	中学校卒	高校卒	短大・大学卒	合計
小学生	4.4	24.6	28.1	36.0	5.3	1.8	100
中学生	5.6	34.4	26.3	29.8	1.6	2.3	100
高校生	2.6	17.5	21.4	46.8	4.5	7.1	100
合計	4.7	29.1	25.5	34.5	2.9	3.3	100

b) 母親の学歴 (単位：%)

	学校に通った ことがない	小学校を卒業 してない	小学校卒	中学校卒	高校卒	短大・大学卒	合計
小学生	26.3	41.2	19.3	11.4	0.9	0.9	100
中学生	24.4	52.1	17.9	4.0	1.2	0.5	100
高校生	6.5	35.7	27.9	24.7	1.9	3.2	100
合計	20.8	46.7	20.3	9.7	1.3	1.1	100

表6 出身民族と親の学歴

a) 父親の学歴 (単位：%)

	学校に通った ことがない	小学校を卒業 してない	小学校卒	中学校卒	高校卒	短大・大学卒	合計
漢族	5.8	25.0	23.5	40.4	3.5	1.9	100
イ族	4.1	31.5	26.7	31.1	2.5	4.1	100
合計	4.7	29.1	25.5	34.5	2.9	3.3	100

b) 母親の学歴 (単位：%)

	学校に通った ことがない	小学校を卒業 してない	小学校卒	中学校卒	高校卒	短大・大学卒	合計
漢族	23.0	35.6	22.2	15.7	1.5	1.9	100
イ族	19.5	53.3	19.2	6.2	1.1	0.7	100
合計	20.8	46.7	20.3	9.7	1.3	1.1	100

「学校卒」の順になっており、「高校卒」、とくに「短大・大卒」の占める割合がごくわずかしかない。また、母親の学歴は、「小学校を卒業してない」の占める割合が高く、次に「学校に通ったことがない」、「小学校卒」の順になっており、母親の学歴は父親の学歴より低いことが明らかである。そして、高校生の親の学歴は比較的に高くなっているが、全体的に見ると、子どもたちの親の学歴は低いと言えよう。

さらに、子どもたちの出身民族と親の学歴との関連を見ると（表6）、父親の学歴が「中学校卒」の場合、子どもの民族出身が漢族でその割合は40.4%、イ族で31.1%となり、漢族はイ族より10%ほど高くなっている。また、母親の学歴が「小学校を卒業してない」の場合、子どもの民族出身が漢族でその割合は35.6%、イ族で53.3%となり、イ族は漢族より17.7%高くなっている。しかし「小学校卒」や「中学校卒」の場合、漢族はイ族より多少高くなっており、漢族の親の学歴はイ族の親の学歴よりやや高くなっていることが分かる。これは、子どもたちの親の世代では、同じく山間僻地に居住していても、漢族に比べて、イ族の教育意識がやや低かったことを反映しているだと考えられる。

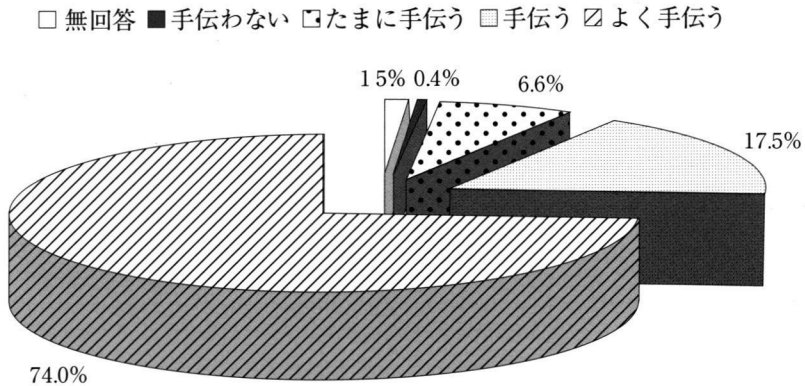


図2 学校休み期間、農作業や家事にお手伝いをするか？

次に、学校が休みのとき、子どもたちの家庭での様子を見てみよう。図2に示されている通り、9割以上の子供たちは農作業や家事の手伝いをしていることが分かる。それを通して、農業文化を習得していくのであろう。

では、家庭でのコミュニケーション言語はどうなっているのかを図3によって見てみよう。

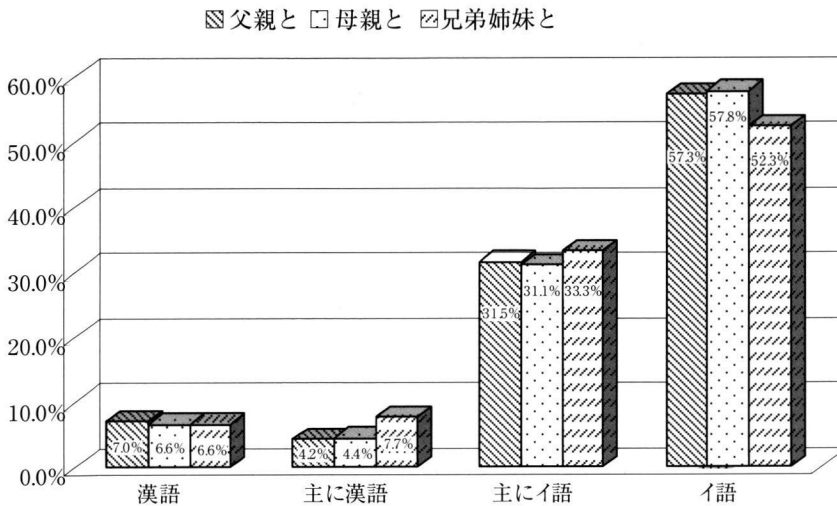


図3 家庭でのコミュニケーション言語

イ族の子どもたちは家庭で親や兄弟姉妹と「イ語」或いは「主にイ語」でコミュニケーションをとっている。しかし学校では共通言語の漢語を勉強することが要求され、しかも漢語が教授言語となっている。子どもたちはそのような学校生活に果たして適応できるのであろうか。

以上のように、地域社会において、各民族はそれぞれの生活空間をもっている。またほとんどの親は農民で、イ族も漢族も農業を営み、地域社会で農業文化が形成されている。そして山に隔たれた空間で、民族の生活様式が維持されており、地域社会でも、家庭でも民族固有の言語が使われている。子どもたちの親の学歴の低さからも、漢文化があまり浸透されていないことが分かる。したがって、このような山間僻地の少数民族地域では、農業文化、民族文化が伝承・維持されていると言えよう。

3. 学校環境、学校生活——漢文化と民族文化の織り成す空間

山間僻地の学校設置は、交通の便や人々の居住状況などにより、多少の違いはあるが、大体、次のようになっている。小学校は分校と中心小学に分けられ、さらに分校は二種類に分けられる。1つは、一学年と二学年しかない簡易学校で、教員も1人しかいない、村小と言う。もう1つは、一学年から四学年まである学校で、村完小と言う。子どもたちは分校での勉強を終えたら、郷・鎮に設置されている中心小学に行かなければ、勉強を続けることができない。中学校は郷・鎮に設置され、1つの郷・鎮には一校しかない。高等学校は県政府機関所在地の小都市に一校設置されている。

山間僻地の学校は種類によって、施設設備も、子どもたちの学校生活や活動も異なっている。ここでは、まず学校種類ごとにその環境を実態調査に基づき整理した上で、そういった学校環境で、子どもたちはどのような学校生活をしているのかを検討する。

筆者の実態調査によって、学校環境は以下のように整理することができよう。

3.1 学校種類とその環境

村小

村小は、村にある小学校の分校のことを言う。簡易教室以外、図書室もなければ、運動場もない。先生が1人で、1年生と2年生の教室に移動するか、同じ教室で勉強させる方法をとっている。

例えば、W鎮にある村小は道路や村から離れており、崖の脇からさきわめる細い泥道に沿って登っていく山腹にある。雨の日なら、滑り落ちることもあろう。土作りの一階建ての建物の中には三部屋ある。二部屋は教室で（1年生と2年生用）、残りの小さな部屋は先生の寝室とオフィスになっている。教室には、40Wの電球が1つある。机も椅子も、そして黒板もぼろぼろになっている。1年生は12人（うち女子学生7人）、2年生は9人（うち女子学生5人）がいる。子どもたちは5つの自然村から来ており、全員イ族である。通学時間は片道平均40分以上かかるという。

子どもたちが朝7時に登校し、教室で自習をする。8時15分から11時まで、授業を受ける。もちろん給食はなく、昼休みは持参の弁当を食べる。ご飯に肉料理の弁当もあれば、ご飯だけの弁当もある。さらにビニールに包まれたおにぎりを持ってくる子どももいる。弁当の中身は家庭の貧富状況を実に反映している。弁当を食べたら、子どもたちは学校の周辺で遊ぶ。とは言っても、まわりに、山の斜面や草木しかない。遊び場は住んでいる村の遊び場と大して変わらない。午後1時30分から5時まで、また授業を受ける。その後、同じ村の友たちと山を越えて帰宅していく。2007年までは、義務教育にもかかわらず、学費や教材費を払う必要があり、それを払えないために、学校に通えない子どももいれば、中退する子どもさえもいた。2007年からやっと無償になり、学齢児童は、一応村小に通えるようになってきている。3年生になると、鎮にある中心小学に移ることになる。

この村小には男子教員が1人いる。この教員は56歳、イ族で、近くの村の出身で、自宅から通っている。教員としてすでに35年間勤務してきたが、この学校では5年目になり、1年生と2年生の授業をすべて担当している。子どもたちが全員イ族で、漢語が分からないため、先生はイ語で意味を解説しながら、授業を進めている。つまりこの学校は、子どもたちも先生もイ族であり、イ語を使いながら、教科書の内容を学んでいる。こういった村小はW鎮に11校ある。

村完小

大きい村にある、一学年から四学年までの小学校は村完小という。子どもたちは学校の寮に寄宿生活をする。寮と言っても、教室の隣にある古い教室に二段ベッドが置かれているだけである。寄宿生は週末のみ、家に帰るのだが、普段は学校で生活をする。貧しい家庭から来る子どもたちには2007年から年間500元（日本円に換算すると、約7千円位）の生活補助金が政府から支給されている。特別貧しい学生には先生が文具品を買ってあげるといふ。

M村完小は、山頂にあり、一学年から四学年まであり、それぞれの学年には1クラスしかない。一学年は29人、二学年は30人、三学年は30人、そして四学年は15人で、合計104人いる。生徒は、漢族2人で、残りは全員イ族である。先生の話によると、漢族であっても、入学すると、すぐイ語に慣れてしまう。つまり、このようなイ族の多い学校では、漢族が入学すると、すぐイ族に同化されてしまうといった状況になるのである。教員は5人いる。校長先生は漢族であるが、ほかの教員は全員イ族である。漢族の校長先生はもちろんイ語を話せるし、授業の際も、子どもたちにイ語で教科書の意味を説明していることが観察された。

この学校では、子どもたちを管理しやすくするために、近くに住んでいる子どもたちも寮生活をさせている。寮には、3人から4人でベッド1つを使っている状態である。子どもたちは15の自然村、3つの行政村から来ている。家に帰る際、片道5キロ程以上もの山道を歩かなければならない。毎週金曜日の午後4時になると、ほとんどの子どもは高学年生について徒歩で家に帰る。遠い場合、2時間かかる。日曜日の午後には学校に戻ってくる。5年生になると、鎮にある完全小学校に行かなければならず、さらに遠くなる。子どもたちに「中心完小にあがると、さらに遠くなりますが、平気ですか？」と聞くと、子どもたちは元気な声で「平気です」と答えてくれた。

子どもたちは、月曜日から金曜日まで、毎朝7時に起床し、8時からは授業を受ける。夜は教室で8時40分まで自習することが要求されている。この学校の敷地面積は狭く、授業用の教室と、寝室として使われている教室、先生の寝室以外、運動場もなければ、図書室もない。昼ごはんや晩御飯の後、子どもたちは学校の周辺で遊ぶ。

つまり、ここでの子供たちは小学校に入るときから親元を離れ、学校で寄宿生活をし、朝から晩まで教室で教科書を使って学習する以外、娯楽活動は一切できない環境にいる。しかし、村小でも村完小でも同じ民族の子どもたちとイ語で話したり、遊んだりしている。先生もイ族の出身の者が多く、イ語で教科書の内容を解説している。教室の中でも民族言語が持ち込まれている。このように学校は漢文化の空間であると同時に、イ族の文化的空間でもある。

中心完小

W鎮の中心完小は一校ある（3キロほど離れたところに分校として、もう一校ある）。一学年から四学年までは、それぞれ2クラスあり、五学年と六学年はそれぞれ4クラスある。学生は644人、このうち570人が寄宿生である。イ族の学生は94%を占めている。学生寮は50人1部屋で、3-4人で1つのベッドを利用している状況である。中心完小は教室、寮、食堂があるほか、バスケット場も1つある。体育の授業ができるようになっている。先生は20人いるが、イ族の先生は7割以上いる。

Y郷の中心完小は山頂にあり、平らなところがきわめて狭く、近くに村がない。一番近い村から山の谷に沿って学校まで登ると、大体40分かかる。この学校は教学用の建物（4階建て）1つと学生寮の建物（2階建て、古い）1つあり、バスケット場も1つある。一学年から四学年まではそれぞれ1クラス、五学年と六学年はそれぞれ2クラスある。学校の至るところに、学生が書いた絵が展示されている。バスケット場で先生の指導の下で子どもたちが生き生きと踊りを踊っているところも観察された。ただ学生寮は危険な建物で、立て替える予定であるが、現在は先生たちが毎日警戒している。郷の中心完小には、3年生以上の子どもたちは英語の授業もある。教師の宿舎は学生寮の隣部屋になる。村小で経験を積んで、業績を上げた先生は中心完小に栄転してくることが多い。

このように、中心完小には教室や宿舎以外、運動場もある。子どもたちはここで娯楽活動もできるようになっている。また、学校には同じ民族の友たちが大勢いるし、同じ民族の先生も多くいるため、子どもたちは違和感なく勉強できる環境にいる。

中学校

1つの郷・鎮には中学校が一校設置されている。W鎮には201、Y郷には216の自然村がある。子どもたちは全郷・鎮の各村から来ている。

中学校はコンクリート作りの教室、宿舎、実験室などあり、大きいバスケット場もある。学校の敷地もかなり広い。

W鎮の中学校は標高2800メートルの高山地帯にある。この中学校には各学年4クラスあり、それぞれのクラスは50人から60人いる。中1は233人、中2は245人、中3は174人で、合計652人で、うちイ族の学生が92%である。

貧しい家庭から来た子どもたちには、年間700元（日本円に換算すると、1万円弱）の生活補助金が支給されている。実際、子どもたちは食堂に、持参してきている食料で食事を作ってもらって生活している。中学校にあがると、家から遠い場合、8時間以上も歩かなければならない。当然、村出身の子どもたちは寄宿生活になる。

学校が畑を所有しているため、午後の授業が終わると、子どもたちは学校の畑で自分

たちが食べる野菜を作っている。また、食べ残しや野菜で、豚も飼っている。子どもたちの働きで、一方で、生活費は安くなり、月80元から100元しかかからない（日本円に換算すると、1500円未満）。もう一方で、家庭や地域社会で手伝いをしながら学んだことはここで生かすことができ、しかも評価されることになっている。

W鎮中学校には現在教員39人いる（定員は42人であるが、県の財政難のため、教員を募集していない）。そのうち、少数民族教師は25人で、64%を占めている。

中学生になると、子どもたちはもう漢語ができるようになっている。教室でも漢語による授業が行われている。

高等学校

山間僻地では、1つの県には県政府所在地の小都市に高等学校一校が設置されている。N県の場合、高等学校の校舎は、立派なコンクリートの建物である。綺麗な教室や明るい食堂のほか、運動場、図書館も整備されている。

学生は全県10の郷・鎮の中学校からあがってきた者である。高等学校は一校しかないので、高校への進学競争はきわめて激しい。

学生数は2400人、一学年800人で、各学年16クラスある。少数民族学生は30%から40%を占め、県の人口比率とはほぼ同じである。教員は190人、教職員で240人いる。少数民族出身の先生は30%いる。

学生は朝7時30分から夜10時50分まで学校で勉強し、週末のみ外出が認められている。いわゆる閉鎖式教育が行われている。しかし、学校は小都市にあるため、学校の近くには、様々な商店、レストラン、映画館、ネットカフェなどがあり、都市文化が浸透している。夜、こっそり学校から抜け出し、ネットカフェで、徹夜でゲームをやる生徒もいれば、勧誘されマルチ商法にはまる生徒もいる。先生も頭を痛めている。現在全国で大卒の就職が難しくなっているため、学生の勉強に対する意欲にある程度影響されている。一部の学生は、努力しても報われないといい、努力しなくなっている。それと同時に、経済発展に伴って、豊かになった家庭も増えてきているため、腹が空かなければ、勉強はしたくない。一方、貧しい家庭から来た子どもは成績がよくても、経済的理由で大学への進学を断念するしかない。子どもの学習への動機付けもなくなっているという。

学生が一日三食も学校の食堂で食べる（節約のため、朝食を食べない学生も多い）。一か月の生活費は150元から200元かかる。ただし、高校生には生活補助金が支給されていない。80%の学生が学校の寮に住む。8人から10人で1部屋だが、4人部屋や6人部屋もある。一学期の寮費は80元であり、学費もあるので、貧困生はなかなか通えない。先生

によれば、貧しい家庭の子どもたちの成績はよいという。

以上のように、村小や村完小、中心小学、中学は田舎にあり、物理的環境が欠如しているが、そこでは漢文化と民族文化の織り成す空間が形成されている。高等学校は小都会にあり、物理的環境が整えられているが、そこには漢文化と都市文化の混じり合う空間が広がっている。

3.2 子どもたちの学校生活

子どもたちはどのように学校生活を送っているのかについて、アンケート調査の結果から確認しよう。

表7 通学状況

(単位：%)

	無回答	学校の寮	親戚や友人の家	自宅	合計
小学生		84.1	1.6	14.3	100
中学生	0.2	95.9	1.1	2.7	100
高校生	92.4	77.8	7.6	14.6	100
合計	0.1	89.9	2.6	7.3	100

まず、通学状況を見てみよう。表7から分かるように、小学生（6年生）の84.1%が学校で寄宿生活をしていて、わずか14.3%の子どもは自宅から通学しており、早くから親元を離れて勉強していることが分かる。また、寄宿の割合が一番高いのは中学生で、95%以上にも達している。高校生の場合、寄宿している割合はやや低くなっている。これは高等学校が、人口がある程度集中している小都市にあるため、一部の生徒は自宅から通学できるからだと考えられる。

次に、学校での授業以外の生活時間を確認しよう。

ここでは、予習や復習の時間、運動の時間、遊びの時間を表8によって確認しよう。

予習や復習の時間については、小学生の6割は1時間で、中学生や高校生の5割以上は2時間から3時間位勉強している。授業以外、全く勉強しない子どもは5%以下で、ごくわずかである。

運動の時間については、小学生が最もよく運動していて、約9割の生徒が1時間から2時間位運動している。それに対して、中学生は8割、高校生は7割以上となっている。学校段階があがるにつれ、運動の時間が若干減っていることが分かる。

遊びの時間についても、全く遊んでいない割合は、小学生で1割、中学生と高校生で2

表8 生活時間の配分（授業時間以外に何をどの位しているか）

a) 予習や復習など (単位：%)

	零	1時間位	2時間位	3時間以上	合計
小学生	0.8	60.8	22.4	16.0	100
中学生	1.6	41.3	41.1	15.9	100
高校生	4.5	42.0	33.8	19.7	100
合計	2.1	44.9	36.2	16.8	100

b) 運動 (単位：%)

	零	1時間位	2時間位	3時間以上	合計
小学生	3.2	54.8	37.1	4.8	100
中学生	9.5	70.0	14.5	6.0	100
高校生	18.5	68.8	10.2	2.5	100
合計	10.4	67.1	17.5	5.0	100

c) 遊び (単位：%)

	零	1時間位	2時間位	3時間以上	合計
小学生	10.7	72.1	15.6	1.6	100
中学生	23.2	60.1	12.7	4.0	100
高校生	20.9	54.9	17.6	6.5	100
合計	20.5	61.1	14.3	4.1	100

割以上となる。また1時間位遊んでいる割合は、小学生で7割弱、中学校と高校生は5割以上で、小学生のほうがよく遊んでいる。

さらに表9から子どもたちの読書についても見てみよう。

読書については、新聞・雑誌を読む生徒は少ない。読む割合（「かなり読む」と「よく読む」）は、小学生が4割であるが、中学生と高校生は1割位となっている。それに対し、小説・漫画を読む生徒は比較的多い。小学生は5割を超えており、中学生は4割以上、高校生は3割以上である。そして、学習参考書を読む割合は、小学生で55%以上、中学生で5割弱、高校生で3割位となり、小学生のほうがよく読んでいることが分かる。このように、やはり学習参考書がよりよく読まれていることが明らかとなる。とくに小学生は中学生と高校生より積極的に新聞・雑誌、小説・漫画、学習参考書を読んでいることが分かる。

子どもたちは学校で異なる民族の人とは当然漢語でコミュニケーションをとっているが、同じ民族のクラスメートとのコミュニケーション言語については、表10に示されているように、イ族の場合、民族語（「イ語」と「主にイ語」）が使われている割合は、小学生で66.6%、中学生で88%、高校生で42%であり、高校生になると、イ語があまり使われなくなっていることが分かる。また、漢族同士でも、イ語でコミュニケーションを

表9 読書の状況（以下の物をよく読むか）

a) 新聞・雑誌 (単位：%)

	ぜんぜん 読まない	たまに 読む	かなり 読む	よく 読む	合計
小学生	12.1	44.4	27.4	16.1	100
中学生	17.9	71.9	7.4	2.8	100
高校生	8.3	77.7	7.6	6.4	100
合計	14.7	68.4	11.0	5.9	100

b) 小説・漫画など (単位：%)

	ぜんぜん 読まない	たまに 読む	かなり 読む	よく 読む	合計
小学生	4.9	39.0	30.9	25.2	100
中学生	5.6	49.7	31.0	13.8	100
高校生	7.6	57.0	19.6	15.8	100
合計	5.9	49.4	28.5	16.2	100

c) 学習参考書 (単位：%)

	ぜんぜん 読まない	たまに 読む	かなり 読む	よく 読む	合計
小学生	9.0	32.8	32.0	26.2	100
中学生	8.1	39.1	35.5	17.3	100
高校生	7.0	58.9	26.6	7.6	100
合計	8.0	42.5	32.9	16.7	100

表10 学校で同じ民族のクラスメートとのコミュニケーション言語

(単位：%)

		漢語	主に漢語	主にイ語	イ語	合計
小学生	漢族	50.0	37.5		12.5	100
	イ族	10.0	23.3	42.2	24.4	100
	合計	20.5	27.0	31.1	21.3	100
中学生	漢族	46.8	16.7	12.7	23.8	100
	イ族	3.5	8.4	52.4	35.7	100
	合計	16.0	10.8	41.0	32.3	100
高校生	漢族	71.3	17.6	3.7	7.4	100
	イ族	30.0	28.0	30.0	12.0	100
	合計	58.2	20.9	12.0	8.9	100

とっている人もいる。これは、イ族地域で生活し、すでに言語的に同化されていることによるものと思われる。

では、子どもたちは学校生活をどう思っているのでしょうか。表11は、学校生活が楽しいかどうかを示したものである。

表11 学校生活が楽しいか

a) 学校段階別 (単位：%)

	全然 楽しくない	あまり 楽しくない	楽しい	非常に 楽しい	合計
小学生	0.8	7.9	34.9	56.3	100
中学生	3.2	9.8	57.4	29.6	100
高校生	3.8	28.8	57.7	9.6	100
合計	2.9	13.6	53.5	30.0	100

b) 出身民族別 (単位：%)

	全然 楽しくない	あまり 楽しくない	楽しい	非常に 楽しい	合計
漢族	3.4	19.1	53.6	24.0	100
イ族	2.6	10.4	53.5	33.5	100
合計	2.9	13.6	53.5	30.0	100

まず、学校段階別に見ると、「非常に楽しい」が占める割合は、小学生で56.3%、中学生で29.6%、高校生でわずか9.6%となっている。また、「楽しい」と「非常に楽しい」を合わせてみると、その割合は、小学生の場合9割以上、中学生の場合8割以上、そして高校生の場合6割である。つまり、小学生と中学生の8割以上は学校生活を楽しんでいるが、高校生の4割位は学校生活が楽しくないと思っている。また、民族別に見ると、「非常に楽しい」が占める割合は、漢族で24%、イ族で33.5%となり、イ族の生徒は漢族の生徒より学校生活が楽しいと思っていることが分かる。

4. 子どもたちの将来展望、民族文化に対する認識

貧しい地域で生まれ育ち、物理的環境が欠如している学校環境で異質な文化を体験・学習している子どもたちは、どのような将来展望をもっているか、また民族文化への認識がどうなっているのであろうか。以下では、それらを検討する。

4.1 子どもたちの将来展望

将来展望については、将来生活したい地域、獲得したい学歴などから見る。

まず子どもたちは、将来どこで生活したいのかを表12によって見てみよう。自分の故郷で生活することについては、「非常に望んでいる」の占める割合は、小学生のほうがやや高く、2割を超えているが、中学生のほうが1割強、高校生のほうがもっと低く、10%もない。ただし、「望んでいる」と「非常に望んでいる」を合わせてみた場合、その割合は、小学生も中学生も5割程度だが、高校生で6割を超えている。

それに対して、大都会で生活することについて、「非常に望んでいる」の占める割合は、民族間の差がほとんど見られないが、学校段階による差では、小学生で5割位、中

表12 将来生活したい地域

a) 自分の故郷で生活することを望んでいるか (単位：%)

		自分の故郷で生活すること				合計
		全く望んでいない	あまり望んでいない	望んでいる	非常に望んでいる	
小学生	漢族	16.1	41.9	16.1	25.8	100
	イ族	8.7	31.5	32.6	27.2	100
	合計	10.6	34.1	28.5	26.8	100
中学生	漢族	13.5	37.3	37.3	11.9	100
	イ族	4.9	38.5	37.2	19.4	100
	合計	7.4	38.1	37.2	17.2	100
高校生	漢族	6.5	27.8	58.3	7.4	100
	イ族	2.0	42.9	46.9	8.2	100
	合計	5.1	32.5	54.8	7.6	100

b) 大都会で生活することを望んでいるか (単位：%)

		大都会で生活すること				合計
		全く望んでいない	あまり望んでいない	望んでいる	非常に望んでいる	
小学生	漢族		16.1	32.3	51.6	100
	イ族	5.4	5.4	35.9	53.3	100
	合計	4.1	8.1	35.0	52.8	100
中学生	漢族		7.1	54.3	38.6	100
	イ族	3.5	13.8	44.4	38.3	100
	合計	2.5	11.9	47.3	38.4	100
高校生	漢族	2.8	13.9	46.3	37.0	100
	イ族		2.0	64.0	34.0	100
	合計	1.9	10.1	51.9	36.1	100

小学生と高校生は約4割である。これは、学校段階があがると、自分の学力で大都会の大学に入れないことや、家庭の貧困により進学できないことなどを認識するようになり、より現実的な考えになったからだと考えられる。また、「望んでいる」と「非常に望んでいる」を合わせてみると、いずれも8割を超えており、大都会で生活することを望んでいることが分かる。

次に子どもたちが獲得したい学歴についても見てみよう。表13から明らかなように、出身民族に関係なく、小学生の8割以上、中学生の9割以上、また高校生のほとんどは短

表13 できればどんな学歴を獲得したいと思うか

(単位：%)

		獲得したい学歴			合計
		中学校	高等学校	短大・大学	
小学生	漢族	12.9	6.5	80.6	100
	イ族	2.2	11.0	86.8	100
	合計	4.9	9.8	85.2	100
中学生	漢族	0.8	7.9	91.3	100
	イ族	3.9	5.8	90.3	100
	合計	3.0	6.4	90.6	100
高校生	漢族			100.0	100
	イ族		2.0	98.0	100
	合計		0.6	99.4	100

表14 自分の置かれている環境から、獲得できると思うか？

(単位：%)

		短大・大学		合計
		不可能	可能	
小学生	漢族	60.6	39.4	100
	イ族	53.9	46.1	100
	合計	55.7	44.3	100
中学生	漢族	57.7	42.3	100
	イ族	58.3	41.7	100
	合計	58.1	41.9	100
高校生	漢族	25.2	74.8	100
	イ族	20.0	80.0	100
	合計	23.6	76.4	100

大・大学の学歴を望んでいる。

しかし、山間僻地の貧困地域で、しかも貧弱な学校環境で勉強している子どもたちは果たして自分の夢が実現されると思っているのであろうか。次に、「あなたの置かれている環境から見て、短大・大学の学歴を獲得できると思いますか」という質問項目からさらに見てみよう。表14はその結果を示したものである。「短大・大学」の学歴獲得が「可能」（「まあ可能性がある」と「非常に可能性がある」）だと思っている割合は、小・中学生で4割、高校生で7割位となっており、表13と比べると、かなり低くなっていることが分かる。また、民族出身による差は非常に小さい。つまり、子どもたちは高い学歴を手に入れたいと考えていても、現実にはそれが実現されないことをも認識しているのである。

4.2 子どもたちの民族文化への認識

表15 イ族の子どもたちが自民族の文化をどう思っているのか

a) 民族衣装を着ること (単位：%)

	ぜんぜん好きでない	あまり好きでない	好き	非常に好き	合計
小学生	2.2	17.2	50.5	30.1	100
中学生	4.9	26.9	52.6	15.6	100
高校生	2.0	14.0	64.0	20.0	100

b) 民族の各種伝統的な行事に参加すること (単位：%)

	ぜんぜん好きでない	あまり好きでない	好き	非常に好き	合計
小学生	1.1	17.4	41.3	40.2	100
中学生	3.6	17.6	50.2	28.7	100
高校生	2.0	18.0	62.0	18.0	100

イ族の子どもたちの自民族文化に対する認識はどうなっているのでしょうか。民族文化は多様な側面があるが、ここでは民族衣装の着用と民族の各種伝統的な行事への嗜好を表15から見てみよう。

まず、民族衣装を着用することについて、「非常に好き」の占める割合は、小学生のほうが一番高く、30.1%となり、その次は高校生で20.0%、中学校のほうが低く、15.6%である。ただし、「好き」と「非常に好き」を合わせると、6割以上の小学生と高校生、約7割の中学生が民族衣装を着ることが好きである。

また、民族の各種伝統的な行事に参加することについては、「非常に好き」の占める割合は、小学生で40.2%、中学生で28.7%、高校生で18.0%、学校段階があがるにつれて、その割合は低くなっていることが分かる。しかし、「好き」と「非常に好き」を合わせてみると、いずれも8割位に達しており、学校段階による差はほとんど見られない。

以上はイ族の生徒の自民族文化に対する嗜好であるが、次は民族文化共生の視点からイ族と漢族の生徒はそれぞれ自民族の伝統的習俗や他民族の文化・伝統についてどう考えているのかを表16から比較してみよう。

まず民族の伝統的習俗を守るべきだと思うかどうかについては、「非常にそう思う」の占める割合は、小学生の場合、漢族で7割、イ族で4割、約3割の差が見られ、かなり大きいと言えよう。また、高校生の場合も2割の差がある。ただし、中学生の場合、民族による差は見られない。また、「非常にそう思う」と「そう思う」を合わせてみると、小学生の場合、守るべきだと思う割合は、漢族で9割以上となるのに対し、イ族で8割にとどまっている。ただし、中学生と高校生の場合、その差は小さくなっている。ここか

表16 自民族の文化と他民族の文化に対する考え

a) 自民族の伝統的習俗を守るべきだ (単位：%)

		全く そう思わない	あまり そう思わない	そう思う	非常に そう思う	合計
		小学生	漢族	3.1	3.1	
	イ族	2.2	17.2	37.6	43.0	100
	合計	2.4	13.6	32.8	51.2	100
中学生	漢族	2.4	13.4	55.9	28.3	100
	イ族	0.6	19.5	51.6	28.2	100
	合計	1.1	17.7	52.9	28.3	100
高校生	漢族	0.9	13.9	40.7	44.4	100
	イ族		20.4	57.1	22.4	100
	合計	0.6	15.9	45.9	37.6	100

b) ほかの民族の文化・伝統を尊重すべきだ (単位：%)

		全く そう思わない	あまり そう思わない	そう思う	非常に そう思う	合計
		小学生	漢族			
	イ族		12.0%	43.5	44.6	100
	合計		8.9	38.7	52.4	100
中学生	漢族	0.8	11.8	44.1	43.3	100
	イ族	1.3	9.4	50.6	38.6	100
	合計	1.1	10.1	48.7	40.0	100
高校生	漢族	0.9	3.7	33.3	62.0	100
	イ族		4.1	49.0	46.9	100
	合計	0.6	3.8	38.2	57.3	100

ら分かるように、イ族の子どもたちは自民族の伝統的習俗の遵守にはやや消極的になっていることが明らかとなる。

次にほかの民族の文化・伝統を尊重すべきだと思うかどうかについては、「非常にそう思う」の占める割合は、小学生の場合、漢族が75%、イ族が44.6%となり、漢族がイ族より約30%高くなり、かなりの差が見られる。しかし、その差は中学生の場合はほとんどなく、高校生の場合もそれほど大きくはない。また、「非常にそう思う」と「そう思う」を合わせてみると、いずれの学校段階でも、その割合は85%以上となり、しかも民族の違いによる差はほとんど見られない。このように、子どもたちは民族文化に対して共生意識を持っていると言えよう。

5. まとめ

本稿では、山間僻地で、しかも貧困地域で暮らしているイ族の子どもたちはどんな学

校生活をし、その学校生活をどう思っている、どんな将来展望をし、そして民族文化への認識はどうなっているのかについて調査結果に基づいて分析してきた。以下では分析結果を踏まえ、若干考察しておこう。

まず、地域社会では民族文化の空間、農業文化の空間が形成・維持されている。村ごとに各民族が住み分けていることによって、また山々によって隔たれた空間で、漢民族もイ族も農業を営んでいる。子どもたちは普段農作業の手伝いをし、その農業文化を学んでいる。貧困のため、そして教育の立ち遅れもあって、子どもたちの親が受けた教育のレベル、とくに女性や少数民族の教育レベルはきわめて低い。これは、一方で少数民族の子どもたちの親は漢語・漢文化に接する機会が限られ、漢語のレベルも低いことを意味している。もう一方で、漢語・漢文化がこのような地域にあまり浸透していないことを示している。また地域社会においても、家庭においても、コミュニケーション言語は民族言語となっている。つまり、子どもたちは学校に入るまでは農業文化とそれぞれの民族文化・言語の中で生活し、その文化を身につけてきた。

次に、小・中学校では、民族文化と漢文化の織り成す空間が形成されている。貧困地域であるため、学校の物理的環境と子どもたちの学校生活は、学校の種類・段階によって異なっている。村小は簡易教室以外何もない。村小で学んでいる子どもたちの学校生活は漢語で編集されている教科書の学習のみになっている。また、村完小の施設・設備も貧弱である。村完小で学んでいる子どもたちは、寄宿生活をし、夜自習時間もあり、長時間勉強する必要があるが、村小で学んでいる子どもたちと同様に、娯楽活動ができない環境にいる。しかし、村小においても村完小においても、子どもたちはそこでほとんど同じ民族の子どもたちに出会い、そして同じ民族出身の先生に教えてもらっている。教室では漢語・漢文化を勉強しているが、漢語を話せない子どもたちには民族言語による解説が行われている。また、中心完小や中学校は郷・鎮にあり、施設や設備もある程度整えている。子どもたちは勉強しながら、野菜の栽培をしている。つまり、地域社会や家庭で身につけたものはここで生かすことが可能なのである。この意味で、小・中学校では、民族文化・地域文化と漢文化の織り成す空間が形成されていると言えよう。

第三に、高等学校では、漢文化と都市文化の混じり合う空間が形成されている。高等学校は小都会にある。そこにはネットカフェ、ゲームなどの都会文化が浸透している。高等学校では、漢語のみによる授業が行われている。イ族出身の子どもたちにとって、同じ民族出身の友だちも、同じ民族出身の先生も少なくなっており、イ語があまり使われていない。その意味で、高等学校では、漢文化と都市文化の混じり合う空間が形成されていると指摘できよう。

第四に、子どもたちの学校生活は学校段階によって異なっている。生活時間について

は、学校段階があがるにつれて、勉強の時間は増えているが、運動の時間や遊びの時間は減っている。これは、学歴社会における進学のプレッシャーによる結果だと考えられる。しかし読書については、小学生は中学生や高校生より積極的に新聞・雑誌、小説・漫画、学習参考書を読んでいることが分かる。学校生活の楽しさについては、全体的に学校生活を楽しんでいるが、楽しさは学校段階があがるにつれ、下がっている。また、民族別に見ると、イ族の生徒は漢族の生徒より学校生活が楽しいと思っていることが明らかとなる。イ族の子どもたちは学校に入る前に、地域社会や家庭で自民族の文化・言語に慣れ親しんでいるにも関わらず、学校で共通言語・共通文化を教えているため、学校文化になかなか慣れず、楽しくない生活を送っていると考えられるだけに、これは意外な結果となっている。しかし、今回の調査は完全小学、中学校、高等学校の学生を対象にしていることから、子どもたちにとって、現在在学する学校は以前在学した学校（例えば村小）より施設や設備がよくなっており、しかも娯楽活動もできるようになっていることと比較して答えているとも考えられる。また、小・中学校では、地域社会に設置され、学校文化に民族文化も地域文化も持ち込まれているため、子どもたちは無理なく適応してきているのであろう。つまり、そこでの学校文化は地域文化・民族文化と一定の連続性があるからだと考えられる。

第五に、子どもたちの将来展望は民族出身による差が見られない。子どもたちは自分の故郷よりも大都会で生活することを望んでおり、またできれば短大・大学という高い学歴を獲得したいと考えている。とくに、中学生や高校生のほうがその傾向が強い。さらに、子どもたちは高い学歴を手に入れたいと考えていても、現実にそれが実現できないことをも認識しているのである。これは都市化、学歴社会に影響されている一方、他方では貧困により、それにアクセスできない現実を反映した結果であろう。

第六に、子どもたちの文化共生の意識は、民族によって差が見られる。イ族の子どもたちの自民族文化に対する嗜好は、学校段階があがるにつれて、好きの度合いが下がっている。また民族の伝統的習俗については、漢族の子どもたちに比べると、イ族の子どもたちは自民族の伝統的習俗の踏襲にはネガティブになっていることが明らかとなる。これは、学校段階があがるにつれて、民族文化が学校文化からだんだん消えていって、漢文化が中心になっていることと無関連ではないだろう。他民族の文化・伝統に対する尊重は、小学生の場合、漢族がイ族より積極的であるが、いずれの学校段階でも、民族に関係なく8割以上の子どもたちが他民族の文化・伝統を尊重すべきだと考えている。子どもたちは他民族の文化に対して共生意識を持っていると言えよう。

以上のように、民族地域の子どもたちは家庭や地域社会で身につけた文化と学校文化とは異なるものであり、学校生活の適応に支障を来していると考えられていたが、現

実では、少なくともイ族の地域での調査から、そのようなことは起きていないことが明らかとなった。それは小中学校において、民族文化と漢文化が織り成す空間が形成されているからだと考えられる。ただし、学校段階があがるにつれて、学校文化の空間に、漢文化がだんだんと拡大し、民族文化の空間が徐々に縮小していくことによって、イ族の子どもたちは民族文化に対してややネガティブになり、都市生活志向、高学歴志向にあるのが実態である。

付記 本稿は、平成21年度から平成23年度にかけの科学研究費による「中国少数民族女子青年の進路選択に関する教育学的研究」に関する共同研究の一部である。研究代表者の小林敦子教授（早稲田大学）に感謝します。

主な参考文献

- 張瓊華 2002「中国における二言語教育と少数民族集団の選択」東京大学大学院教育学研究科紀要 第41巻
- 張瓊華 2008「中国農村貧困地域における義務教育の現状—学齡児童の就学状況を中心に—」国際基督教大学 教育研究 50集
- 張瓊華 2009「中国貧困地域における貧困と教育に関する考察—4つの貧困県の比較から—」国際基督教大学 教育研究 51集

注

- ¹ 県政府関係者に対するインタビュー調査によるものである。
- ² 県政府関係者に対するインタビュー調査によるものである。

(非常勤講師)